

季の熱さにマラリヤや、熱帯病にむしばまれて、戦友たちが、つぎつぎと倒れる者が続出して、ただ死を待つばかりであった。

この島に送られた者は、英軍がふたたびシンガポールに上陸するためにシンガポール及びマレイ地域にいた日本軍人・軍属・民間人約十万人が島流しにあつてこの島にきたのである。この地域には特殊の風土病があつて、その病気にかかるほとんどが助からない。病名は黒水病であり病気にかかると明日のいのちも保障が来ないといわれていた。

毎日のように何人かの戦友が点呼をすまして急に黒い小便をしてすぐ病院に送られて、明日の朝は死んでしまうという恐ろしい病気である。一番こわいのは朝と、夕方にする小便であった。そのはずである、その小便によつて生死のわかれめとなるのである。

また、苦しいのはそればかりではなく排便である。毎日の食事が重湯ばかりで栄養になるものはなく、五日も六日も過ぎて便所に出るものはなく、長い時間かかんでいても、でるものがでないので倒れてしまうような苦し

みである。そのはずである食べた木の葉の繊維が水分のない腸のなかでかたまつてしまい、力のない身体で青筋を立てていきんでみてもひとつも出ない。最後になつて出るものは、黒く堅く丸い、まるで兔の便のようなものが大きくなつてしまつて肛門からでられないので、便所に行くときは手に竹ベラを持つてあてがつて出す始末である。

このような食糧事情のため栄養失調になり、部隊の約二割ぐらいの戦友が、終戦後になつて死んでいったのである。

その後になつて英軍の食糧が補給されたので、隊員は体力を回復することが出来た。

### ミンダナオ島の攻防戦

島根県 田中堅一  
島根県 勝部孝吉

昭和十六年十二月、現役兵として朝鮮第四三部隊入隊

のため広島に集合、十二月十五日宇品港にて乗船、咸鏡南道咸興の教育隊第四三部隊に入隊しました。

私共の教育隊は朝鮮の志願兵がまじり、一個中隊十人程度でした。私ども以前は一般歩兵には志願兵がまじっていましたが、歩兵連隊の機関銃中隊等重火器中隊には志願兵の入隊者はなく、私共の時、はじめて重火器中隊にも朝鮮人の方の入隊があり、私の機関銃中隊は二人でした。彼等は私共と一緒に教育を受け、なんらかわったこともなく、日本語もじょうずでした。妻帯者もまじっていました。

教育隊は三か月で終了し、朝鮮七十四連隊に転出し、つづいてまた三か月の教育を受けました。私達は昭和十六年十二月より約二か年半をこの部隊で朝鮮北辺の元山市、虎島、千徳飛行場等の警備にあたりました。北満の満州軍と同様にソ連に対する北辺の警備であったのです。

昭和十九年四月二十九日動員下令、五月十日釜山港を出発、下関の海上で二泊中、海上で後統の師団（朝鮮平壤第三十師団）の各部隊と合流、師団の編成を終わって出

港しました。

師団の各歩兵連隊と野砲、騎兵、工兵連隊等一般師団の編成で配属部隊はなく、砲兵、騎兵共に馬匹編成でした。

また歩兵連隊は三個大隊。大隊に機関銃中隊、歩兵砲小隊、連隊に連隊砲中隊、速射砲中隊が各々一個中隊の編成でした。

船団は十一隻の輸送船で五月十五日ごろ下関を出航しました。護衛艦は砲艦が三隻でした。ときどき上空を飛行機が護衛につく程度でしたが天佑にめぐまれ、不思議に敵潜水艦の襲撃もなく、途中マニラ、セブ島等に寄港し、五月二十五日、目的地ミンダナオ島スリガオに到着。敵の空襲をさけて一日で弾薬、糧秣の揚陸を完了しました。

当時の部隊としては海没のため資材兵器等を揚陸しない部隊の多かったにもかかわらず、この部隊は完全に戦力を温存してミンダナオ島の守備にいたりました。

上陸後、勝部は三大隊の本部付（一等兵）セドリンド地区の警備に、田中は二大隊の第二機関銃中隊・第四小

隊第八分隊長（兵長）として警備についた。

まもなく敵部隊の上陸を予想してミンダナ島最南端のサランガニ地区に、各大隊ごとに移動をおこなった。移動は船艇によっておこなわれた。サランガニ地区においては棉畑に陣地構築にはげんだ。サランガニ地区にいたのは十九年十二月ころまでで、この戦闘は、大隊長堀田少佐は一個大隊を全滅させる偉功を樹てた。そのため降伏後收容所内でこの大隊長は帯刀を許される特別待遇で迎えられた。

第二天隊と連隊の残存兵力は五月二十四日マナゴック地区に進出した敵を迎え激突した。このはげしい攻防戦で、密林はまったく裸となり、強力な火力の洗礼を受けて戦った。この間、第二天隊長と第七中隊長が行方不明となり、数次の搜索隊をだしたがついに行方は不明であった。

六月八日ごろ戦力のつきた残存兵力は、マグランギ河上流地区で河をわたって密林へとせん入した。集結の目標は「クロエ」地区と定め、蝸牛のように一步一步、歩を運んだ。

補給は十九年十二月「サランガニ」への配備変更にもなう集結時までであった。それからあとは現地自活で一年十か月を食いつないだわけ。

食糧も補給がなかったが衣服、靴も同様で、靴は朝鮮をでてから一度も補給がなく、裸足で歩きました。この島は珊瑚礁でできているので裸足の足裏はひどく痛み苦しみました。現地自活は自分達で「サツマ芋」をつくって自活しました。

降伏時、全員で百五十人であった。

〔田中〕私はマナゴックの戦闘ののち、サブトンに後退するとき渡河地点で至近距離から狙撃を受け、咽喉部に貫通銃創を受けました。生死の境のなかをアゴサン川を船でくだって本隊に遅れること四、五日後、アブサン收容所に收容され命拾いをしました。

〔勝部〕クロエの山中にて降伏しました。潜行途中で大きな現地人のつくった芋畑を発見して大助かりでした。在島中、現地人に接触することは非常に少なかった。八月十七日、携帯無線で日本軍の無条件降伏を知りました。ついで米軍機の勧告ピラに

「日本は敗けた。山から降りてこい。内地へ帰してやる」

等を知りました。

ついで九月になって山下奉文大将の降伏宣言をラジオで聞いて投降することとなりました。海岸線の「ブツァン」「ガマヤン」を経てレイテ收容所にはいりました。

翌年二十一年十二月五日、レイテ島を離れ帰還の途につき、同年十二月十八日名古屋港に上陸復員となりました。

## 南方戦線ハルマヘラ苦闘記

茨城県 飯塚 静 男

(軍歴)

昭和十六年徴集、第一補充兵。

昭和十六年と昭和十八年の二度にわたり補充兵の教育のため、三日程度の教育訓練を受けた。

昭和十八年七月二十五日に臨時召集で水戸連隊に入

隊、十八年八月十一日水戸を出発、釜山、山海関を経由、南京より船で揚子江を遡江、八月末に漢口、さらに九月二日、中支湖北省孝感県で中支派遣第五二野戦道路隊(中支軍直轄)に転属することとなった。

この隊は二個大隊編成で、一個中隊三個小隊、一個小隊四個分隊、一個分隊十人の編成であった。

九月三日より十月二十五日まで第一期教育がおこなわれた。この間に古年次兵は常德参戦に参加した。

この孝感付近は気温が温暖で米の二期作が可能な地帯であったが飲料水が悪く、アミバー赤痢が多発した。アミバー赤痢は特效薬がなく、生水を絶対飲まないこと以外に予防の手段がなかった。

私たちは十月二十五日、第一期教育終了と共に常德作戦に参加、第三十二師団に配属されました。

常德への進路は道らしい道とてなく、歩兵はどんどん進撃するが砲、戦車、輜重車両等の進撃ができない。河という河に橋がないために私ども工兵隊は車両を通過させる橋梁づくり明けける毎日でした。

敵弾のなかの橋梁作業中、古年次兵が真っ裸で肩間に